

記念絵はがきと

記念スタンプ

前号にひきつづいて小澤コレクション所収の記念絵はがきを素材に、記念スタンプについて考えてみたい。

細馬宏通著『絵はがきの時代』（二〇〇六年刊）には、細馬氏が絵はがき屋の店先で発見し購入した、東海道中膝栗毛の戯画絵はがきの揃物（以下「揃物」）についての紹介がある。それは、元の所有者が、明治三九（一九〇六）年八月一〇日から三一日にかけて、東海道の宿場名を冠した郵便局を、東の日本橋から西の天津まで、一つ一つ訪ねて、絵はがきの一枚一枚に切手を貼り、郵便局名が入った消印を押したものであった。細馬氏は、鉄道でなく「むしろの弥次喜多にならって、東海道を徒歩で旅した可能性の方が高いのでは」とみている。そして「この絵はがきの持ち主は、時間の欠けた揃物に、新たに時間の流れを刻むべく旅人になったのではないか」（同書六〇頁）と評した。

「東海道」といっても、五十三次の旧東海道と、鉄道の東海道線とはルートが異なり、現在の名古屋を境に、街道は三重県に南下し、鉄道は岐阜方面に北向する。古い宿場町のなかには、鉄道敷設を忌避する例もあり、旧東海道と鉄道の停車場とが離れている場合も少なくない。鉄道で移動したとの即断を避けて徒歩で旅したとの細馬氏の

見方も肯けるが、双方もちいた可能性もある。

また「時間の欠けた揃物に、新たに時間の流れを刻むべく旅人になった」との評価も別の読み方ができる。大胆に推測を加えるなら、元の所有者は、「揃物」に切手を貼り消印を押すために、旅をしたわけではあるまい。絵はがき収集家ならば、訪問先の旧宿場の郵便局で、当地の風景絵はがきが売っていないか尋ねたであろうし、売っているならば買い求めて、それにも切手を貼り、消印を押していたかもしれない。膝栗毛「揃物」と分離してもはやその経緯はわからないが、「揃物」にコレクションとしての親密性を高めて、当地の絵はがきで旅人としての思い出をより確かなものにした、という可能性が高いのではあるまいか。

記念絵はがきと記念スタンプ

膝栗毛「揃物」の例をひいたのは、郵便局の日付スタンプが、大量に同一物が発行される絵はがきに対して、コレクションとしての付加価値と親密性を付与した事例だからである。当室所蔵の小澤コレクションは、特定のイベントやPRを目的に作成された記念絵はがきと、風景絵はがきで占められるが、コレクションの充実のために郵便局の日付スタンプが押されたものはない。しかし、記念スタンプが押されたものは少なからず存在する。

郵便局の日付スタンプは、郵送に必



図1 横浜開港五十周年祭の記念スタンプ 小澤コレクションより
 左上：横浜貿易新報社、右上：横浜商業会議所、
 左下：横浜市、右下：不明。
 このほか、横浜毎朝新聞社の記念スタンプのある絵はがきが横浜市中央図書館にある。

要相当の切手を貼った絵はがき以外は押すことができない。これに対して記念スタンプは、絵はがきが発行された由来とその年月日などをデザイン豊かに刻印したものが多く、おそらくは記念イベント会場などに置かれたスタンプ台で自由に押せたものと考えられる。日付などをあらかじめ絵はがきに印刷することは可能であるが、それでは味気ない。表情に富む記念スタンプを随意の場所に押すという行為が、記念絵はがきとコレクターとの親密性を増すのである。もちろんすべての記念絵はがきに対して、記念スタンプが作られる

わけではない。

記念スタンプの種類がもつとも多く確認できるのが、横浜開港五〇周年祭連絵はがきである。小澤コレクションだけでも四種類ある（図1）。その他にもあることは、横浜市中央図書館所蔵の絵はがきでも確認できる。

学校絵はがきと記念スタンプ

すでに『市史通信』二七号に掲載した記念絵はがき「横浜市立尋常第二戸部小学校（西平沼町）」に押された記念スタンプをとりあげよう（図2）。

①部分を拡大した図3は、開校式記念



図3 ①記念スタンプの部分



図2 横浜市立尋常第二戸部小学校（西平沼町）〔絵はがき〕
小澤コレクション（以下同じ）

のスタンプであり、それが明治三十九年一〇月二十七日であることが知れる。また校章と思われるものも描かれている。

②は、校舎の玄関である（図4）。

すでにある学校の新築記念絵はがきの場合、生徒が校舎のまわりに集まって

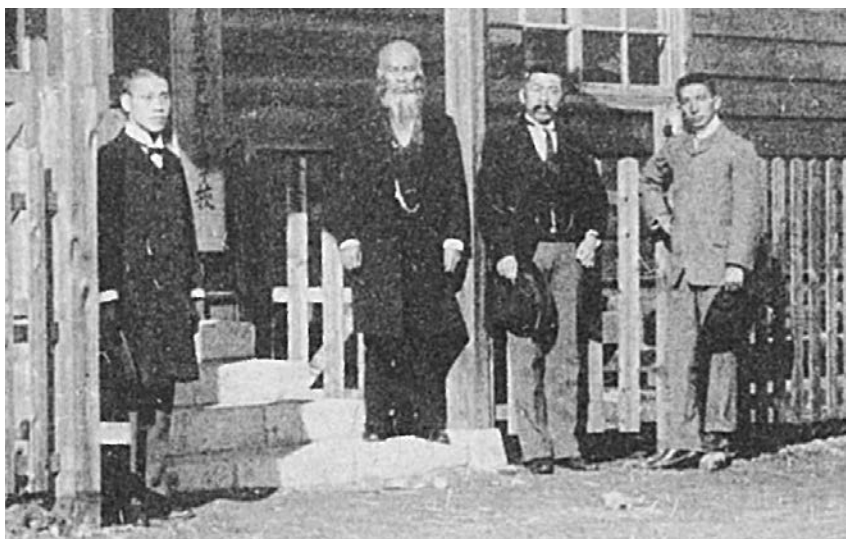


図4 ②西戸部町の名望家たち 最右が平沼亮三。

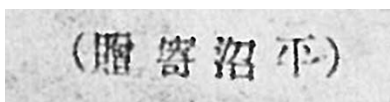


図5 ③「平沼寄贈」の文字

学校関係の記念絵はがきは数多く、『市史通信』前号のトッポに掲載された、横浜高等商業学校の開校記念絵はがきにも、校章をデザインし

たか、開校式の会場でスタンプ台が設置されて押されたものか、そのいずれかである。前者ならば記念式を挙げる側が、後者ならば記念品として受けた側がスタンプを「押す」行為をしたこととなる。

た記念スタンプが押されている。また、神奈川県女子師範学校が、神奈川県立高等女学校と併置されていた時代の「創立記念第三回体育奨励会」の絵はがき（図6）は、「6.5.5.」のスタンプで、大正六（一九一七）年五月五日とわかる。この日は、明治四〇（一九〇七）年の開校から一〇年目の記念日であった。大正四年に「矢舁模様元禄袖」の制服が定められ、おそらくそれで「体育奨励会」に臨んだのだと思われる。地味で野暮つたといわれ、生徒の評判は芳しいものではなかった制服で、図版から受ける印象は開校時のものといつてよいような様子である（『神奈川県教育史・通史編下巻』一九八〇年刊、二三七〜八頁）。

いる事例が多いが、開校記念であることから、ここでは生徒はなく、成人男性四人である。このうち右の人物は西平沼出身の名望家・平沼亮三である。

この半年後の明治四〇年三月、父九兵衛逝去の跡を継ぎ、平沼家当主となり、さらには市会議員に就き、平沼貯蓄銀行の経営にあたることとなる。市立尋常小学校とはいえ、当地の名望家たちの寄付などもあって、小学校の新設があったのであろう。そして平沼をふくむこの四人は、西平沼に学校を作ることに尽力した名望家たちであったと思

われる。③の部分は、絵はがき左下に小さく印刷された「平沼寄贈」の文字（図5）。平沼亮三の寄付でこの絵はがきがつくられ、配られたであろうことを示している。

この絵はがきは、校舎が竣工した直後に写真が撮られ、印刷して絵はがきにし、開校式に間に合わせたものにちがいない。記念スタンプなしには、開校記念であることも、その年月日も、絵はがきから伝わるできなかった。それではこのスタンプはどのような場所で、誰によって押されたのであろうか。開校記念の記念品として、あらかじめ押されて配布されたか、開校式の会場でスタンプ台が設置されて押されたものか、そのいずれかである。前者ならば記念式を挙げる側が、後者ならば記念品として受けた側がスタンプを「押す」行為をしたこととなる。



図6 創立記念第三回体育奨励会（絵はがき）
神奈川県女子師範学校・神奈川県立高等女学校
背景の図柄に重なって見にくいですが、スタンプには「あやめ」が描かれている

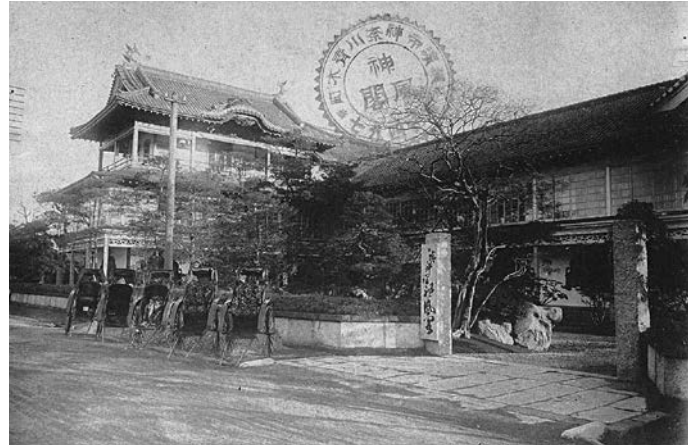


図7 神風閣（絵はがき） 門柱に「御料理神風閣」の看板がある。

神風閣絵はがき

神奈川青木町の遊郭「神風楼」が、「神風閣」と改名して、料理・貸席業に転じたのは、明治三九（一九〇六）年一月三日。この絵はがきは三枚あるうちの一枚（図7）であるが、全体が何枚あったかはわからない。しかしその豪華なたたずまいは、遊郭時代を彷彿とさせるものである。どこにも「開業記念」などの語は見いだせないが、開業時に作られたものと思われる。スタンプには住所と電話番号とがあり、客の利用の便になるばかりでなく、郵便で送られれば、格好の宣伝効果をもたらす。このような、料理店の絵はがきは、小澤コレクションには、関東大震

災後の「割烹八百政」と「牛鳥御料理千葉屋」（図8）の二種類があるが、残念ながらスタンプはない。

東宮殿下渡欧奉送記念絵はがき

のちの昭和天皇、皇太子裕仁親王は大正一〇（一九二一）年三月三日、横浜港から渡欧の途につき、イギリス・スコットランド・フランス・ベルギー・オランダ・イタリアを訪問し、九月三日横浜に帰朝した。この皇太子の渡欧は、第一次大戦の戦勝国日本の若き指導者をヨーロッパに広める一大盛事であった。

三月二日～三日にかけて新港埠頭での奉送の光景を撮した組絵はがきがある。解説一枚・図版七枚の八枚組。作成者は「横浜四方六識」、

実名はわからない。三月三日の新港埠頭での奉送客に対して出された整理券は「二万と予想」されたほどであった（「横浜の準備」『横浜貿易新報』大正一〇年三月三日）。この奉送客ばかりでなく、ニュース画像としてもこの記念絵はがきの購買は多くが見込まれた、といえよう。

図9は図版(2)、新港埠頭に建てられた「奉送塔」の絵はがきである。七枚のうちこれを掲載したのは、他の六枚に比べて、記念スタ

ンプが明瞭であることによることも事実であるが、なによりも二本の塔に書かれた「奉送」の文字と、「東宮御帰朝奉迎記念」のスタンプ。すなわち九月三日の帰国を祝して作られたものであった。図柄はユーラシア大陸をデザインしたもの。

「横浜四方六識」は、皇太子が横浜から欧州に向けて出港する写真を撮影して絵はがきを作って販売し、帰朝を期してスタンプ押印の機会を設けた、といえる。もちろんニュース性の高い記念絵はがきであるから、事後でも十分に売れたであろうし、スタンプも、自ら押すという行為によってコレクションとしての親密度を深める手段として、これまた事後



図8 牛鳥料理店千葉屋・新築記念（絵はがき） 震災後～昭和前期 商工名鑑類のなかには、商店の開業年月が記されたものがあるが、「新築」年月までは記載がなく、絵はがきの制作時期の推定がむずかしい。



図9 東宮殿下渡欧奉送記念（絵はがき） 「2」横浜新港埠頭の奉送塔」と題された7枚組絵はがきのうちのひとつ。

であつても活用されたと思われる。新聞をつうじて、皇太子の動向は時々刻々伝えられたから、帰国はスケジュール通りであったとしても、九月三日その日の横浜帰着は台風などの不慮の事態でスケジュール通りとなるかはわからない。仮に九月四日・九月五日のスタンプを作って無駄にしたとしても、絵はがきの購買力でのようにでもあがなえたのではないだろうか。

記念スタンプはさまざまな事柄に思いをはせるきっかけを提供してくれる。

（平野正裕）